

## (夏休み雑感 ) 海外旅行と家族

息子が、海外旅行から無事帰ってきた。もう、彼は何十回も世界各地に行っているから、今更心配しても仕方がないのだが、それでも元気な顔で帰宅したのを見るとほっとする。

近年の旅行では、Eメールやスカイプでの連絡が適宜来るので、旅行の途中で何度も無事を確認しているのだが、それでも、ちょっとメールの来る間隔が空いたりすると、たちまち心配になり、息子が置いていった旅行日程のメモと現地との時差などから、メールが出せる環境にないタイミングかどうか、妻は検討を始め、私にも考えさせる。

Eメールなどなかった時代には、もっと大変で、「無事」を知らせるために、とにかく国際電話をかけるように言っていた。時差の関係もあるし、昼間は両親ともいない場合もあるので、しばしば、真夜中にかかってきたが、それでも、寝不足などものともせず、無事を知って安心したものである。

まあ、これほど気になるのも、もちろん親子ということもあるが、彼の海外旅行は、ほとんどの場合、彼自身が自ら計画し、必要な手配をして出かけるオリジナルな旅行であり、多くの場合、一人旅でもあるからだ。

旅行社の企画したパック旅行への参加や、そうでない場合でも同行者のいる旅行なら、何かことがあれば、何らかの形で連絡もあるだろうが、彼のような旅行では、そのような期待はほとんどできない。

海外旅行が趣味なのはよいが、二人旅でもしてくれるようになれば、親の心配もかなり軽減されるし、本人も更に楽しめるのではないかと、思ったりしている。

ちなみに、私は子どものときから、乗り物にあまり強くなって、その面での自信が乏しいため、昔も今も、進んで海外旅行などする気にはならないが、公務出張は上手に辞退しきれず、官庁勤務時代に公務で2度出かけたことがある。

最初の海外出張は、37年も前で、自宅から家族全員で羽田空港までタクシーで乗りつけた。当時は、役所の関係者がわざわざ空港に見送りに来てくれたりするので、小さい子どもが二人いたけれども、家族も見送りに出ないわけにはいかなかったのである。

出張の主たる目的地はイスラム革命前のイランであったが、われわれの相手をしてくれた政府の官僚には女性もいて、もちろんチャドルなどかぶっておらず、普通の洋装をしていた。街でも、テヘランではチャドルが目立つほどではなかったが、地方へ行くと、チャドルが普通だった。ちなみに、2年後、イスラム革命が起こり、同国で女性の服装がどうなったかは、周知のとおりである。

ちょうど、その頃に、直属上司から、フランスに赴任する話を打診されたが、即座に断った。まだ当時は、文部省の人間が外国に赴任すべきポストは、ほんのわずかだったので、行きたい人を見つけるのは容易だったと見えて、特に問題にはならなかった。

しかし、その後、文部省からもたくさんの後輩たちが各地の在外公館に出向するようになったので、私は生まれるのが少し早くて、助かったのかもしれない。